



薬の減量について



精神面の治療で使われる向精神薬はその種類と時期によっては減量が可能な場合があります。
減量という点から、向精神薬の種類についてお伝えします。減量にあたっては主治医の判断が重要です。

抗精神病薬

幻聴や幻視といった幻覚、現実にはないことを強く信じ込む妄想に対して有効で、気持ちを落ち着かせる作用も強い薬です。服用してすぐに気持ちを落ち着かせる作用は見られますが、幻覚や妄想への最大の効果の発現には4～6週間かかります。統合失調症の治療に用いられた場合には幻覚や妄想が収まってからも、一定期間の服用が必要になります。なお、複数の薬ではなく、単剤治療といい、一種類の薬のみ用いることが望ましいとされています。

減量法：状態が安定している場合には、維持療法として薬を段階的に減量したり、種類を減らすことが可能です。ただ、完全に中止するかどうかは再発の回数や精神状態を踏まえ、慎重な判断が必要です。

抗うつ薬

抑うつ感や意欲低下といった抑うつ症状に対して有効で、不安を和らげる効果もあります。最大の効果の発現には4～6週間かかります。うつ病の治療に用いられた場合には、抑うつ症状が治まってからも、半年以上の服用が必要になります。

減量法：状態が安定している場合には、段階的な減量が可能です。完全に中止する場合には、再発の回数や状態を踏まえ、慎重な判断が必要です。

抗不安薬

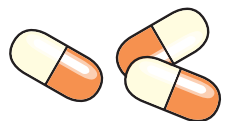
不安障害、統合失調症、うつ病などの不安に使用されます。不安を和らげるほかに、筋肉の緊張を緩め、けいれんを抑え、眠気をもたらす作用があります。抗精神病薬や抗うつ薬とは異なり、服用直後から効果が現れます。効果ははっきりとしている分、依存性もやや強い薬です。統合失調症やうつ病に対しては不安の強い時期に限ってのみ用いるべき薬です。不安には有効ですが、統合失調症の幻覚妄想、うつ病の意欲の低下や抑うつ感には基本的には無効だからです。不安が落ち着いたなら、最初に減量中止すべき薬です。副作用は少ないものの、ふらつきと眠気。物忘れが見られることがあり、特にアルコールとの併用は危険であり、注意が必要です。世界的にも各国の中で日本が突出して処方量が多い薬であり、日本ではやや安易に使用される傾向にあります。

減量法：不安は克服できる可能性がある感情です。一日2～3回服用している場合には、全部一度に中止するのではなく、不安がない時には半錠にしてみる、あるいは、抜きにして様子を見てみるといった方法がいいでしょう。また、数種類の抗不安薬を服用している場合には一種類ずつ取り組んだ方がいいでしょう。急に全て中断すれば不安が強まったり、時にけいれん発作を起こすことがあるので、段階的に取り組めばいいのです。

睡眠薬

抗不安薬と類似の化合物で、抗不安薬の催眠効果を強めたものといえます。作用は長時間作用型～短時間作用型に分けられ、不眠のタイプによって使い分けられます。不安障害、統合失調症、うつ病などの不眠に使用されます。不眠に対して、服用直後から効果があらわれます。もとの精神状態が改善し、不眠も見られなくなったのであれば、減量が可能です。ただ、短時間作用型の睡眠薬を突然中止した場合には、以前より強い不眠が見られることがあり、注意が必要です。

減量法：就寝前の疲れや眠気が強いときに限ってやめてみる。あるいはもとの薬を半錠にして服用してみるといった工夫が必要な場合があります。数種類の睡眠薬を服用している場合には一種類ずつ取り組んだ方がいいでしょう。なお、短時間作用型のものと長時間作用型の睡眠薬を同時に用いている場合には短時間作用型のほうが中止が難しいので、比較的中止しやすい長時間型を残し、短時間作用型のものを最初に中止してみたほうがいいでしょう。



服用している患者さんが無理のないペースで薬を減らせますように



町田まごころクリニック

Machida Magokoro Clinic

〒194-0022 東京都町田市森野 2-8-15 AWA 渋谷ビル 1F

E-mail : info@magokoro-clinic.info

www.magokoro-clinic.info

ナヤミフヨウ

TEL :042-85 1-7824 (予約)

(FAX)